

太 刀

「たち」は腰に吊るします。これを「佩く」といいます。古代において直刀には「大刀」「横刀」の文字を用い、「たち」と読みました。「たち」の語源は「断ち切る」から生まれたといわれ、片刃です。「劔」は両刃ですが、社寺や貴人の宝刀の場合は「劔」と書いて「たち」と読み、片刃の場合もあります。「太刀」は平安時代に生まれた反りのあるいわゆる日本刀のことを言います。

刀

「刀」とは広義では刀劔全体を指し、狭義では「刀」そのものを意味します。刀は時代の移り変わりによりその意味する形が変わってきました。

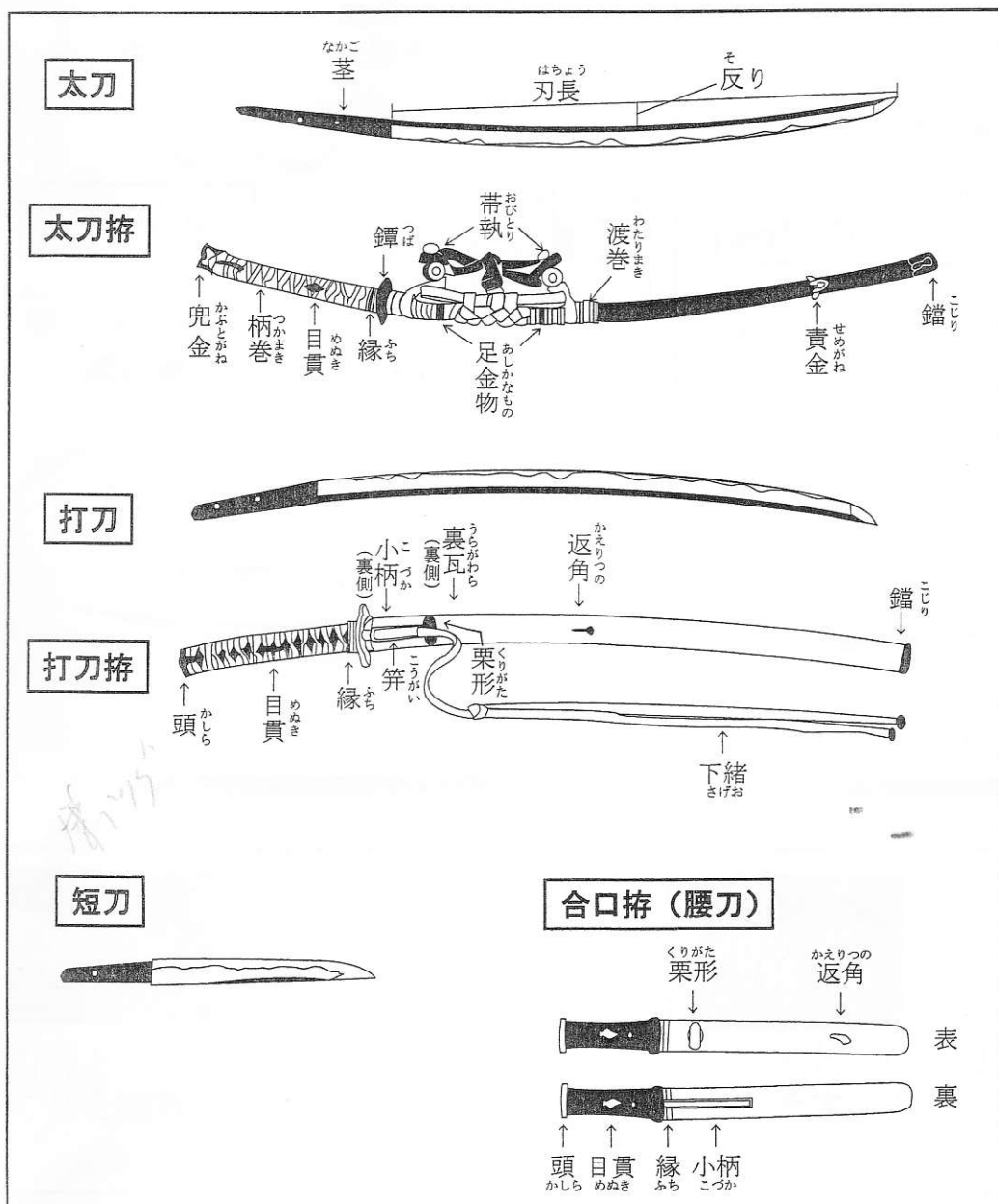
刀の移り変わり

平安・鎌倉時代には刃長が30センチ（1尺）前後の短いものを刀といい、これに拵をつけて腰刀、鞘巻などといいました。室町時代には太刀の指し添えとして50～60センチ（2

尺前後）の刀が用いられました。これを打刀または鐙刀と呼びました。

桃山時代になると、太刀ではなく長短の打刀を指すようになり、江戸時代にこれを大小といい、制度化されました。その大小の大を「かたな」、小を「わきざし」と呼ぶようになりました。

また、鎌倉時代や南北朝時代の太刀を磨り上げ（短くすること）銘の部分を取り落としたものがあり、これも刀と呼んでいます。



参考資料
「日本刀鑑賞のしおり」
1F売店発売中